

巻頭随想

[かんとうずいそう]

代表取締役社長 酒匂明彦



昨年8月、JISAから「構造改革に向けたアクションプランー来るべき変化に向けた積極的な適応戦略ー」が発表された。要点は、受託開発型からサービス提供型へのシフト、労働集約型から知識集約型へのシフト、顧客従属型からパートナー型へのシフト、国内産業・国内競争からグローバル化へのシフト、多重下請構造から水平分業型へのシフトの5つにある。これは、その前年7月に同じくJISAが作成した「情報サービス産業を巡る市場環境に関する調査ー今後5年から10年間の業界展望と課題ー」を受けて作成されたものだが、それが発表された際、「前にも同じようなことを言っていたような」という反応をされた業界記者氏があったと聞く。

それはそうかもしれない。なぜなら、私もそうだから。

JISAの言っていることが的外れなのではない。逆である。まったくそのとおり。ただ、ここで言われていることの本質は、実は日本のソフトウェア産業の黎明期、すなわち我がCACが創業した頃にも有識者には認識されていたことだった。当社の古い社内報やレポート誌を眺めると、当産業の有り方について今日に通じる問題提起をいくつも見つけることができる。

それにも関わらず、今日、改めてJISAからこうした報告書が出されるということは、日本の情報サービス産業が、本質的な構造変革を成しえないまま、何十年も経ってしまったことを示していると言えよう。そして、この産業の一角を占める当社も、そ

の例外たりえていない。私は、そのことを強く憂えている。当社だけでも、なんとかしなければ。

この1月1日から、CACの社長の任に就いた。図らずも、ではない。思うところあり、である。何を目指しているかを一言で表すなら、CACを「誇りを持てる会社」にしたい、ということ。そのためにもっとも大切なことは、当社の存在意義、レゾナントルを確立することだと思っている。

厳しい市場経済の中で現に存在しているのだから、今も存在意義はある。ただ、それは、当面の、また一定の顧客ニーズを満たしているに過ぎないのではないか。顧客の期待を超える存在になれてはいないであろう。我々にはもっと高いポテンシャルがあるはずで、それを開花させ、顧客の期待を超え、それによってさらに高いレベルを期待される、そういう存在になってこそ、自分はCACの人間である、自分こそCACである、と誇れると思う。やや僭越な物言いになるが、業界全体にも、そうした気概、矜持が必要であろう。そうでなければ、早晩、多くが新興諸国の企業に取って代わられることになる。

社長就任早々、いきなり自分の役割のハードルを上げてしまったかもしれない。しかし、これが今の偽らざる心境であるとお伝えしておきたい。CACは、もっと知的で力強く、創造性あふれる存在になりうると私は信じている。